

**中島ヤマントン古墳群
分布調査報告書**

附 机島古墳群

1998

石川県教育委員会

中島ヤマントン古墳群 分布調査報告書

附 机島古墳群

1998

石川県教育委員会

例 言

- 1 本書は石川県鹿島郡中島町中島地内に所在する中島ヤマンタン古墳群1号墳、41号墳の範囲確認調査報告書である。
- 2 調査は石川県土木部道路建設課所管の一般県道長浦中島線道路改良工事に伴う事前の埋蔵文化財分布調査として、石川県七尾土木事務所長の依頼を受け、石川県教育委員会事務局文化財課（担当 富田和氣夫、金山哲也）が実施した。
- 3 本書は、湯尻修平（石川県教育委員会事務局文化財課主幹兼係長）、大西 顕（同主事）、富田（石川県立埋蔵文化財センター主任主事）で分担執筆し、あわせて唐川明史氏（石川考古学研究会幹事）に玉稿を賜った。編集は浅野豊子氏の協力を得て富田が担当した。執筆分担は文末に記した。

報告書抄録

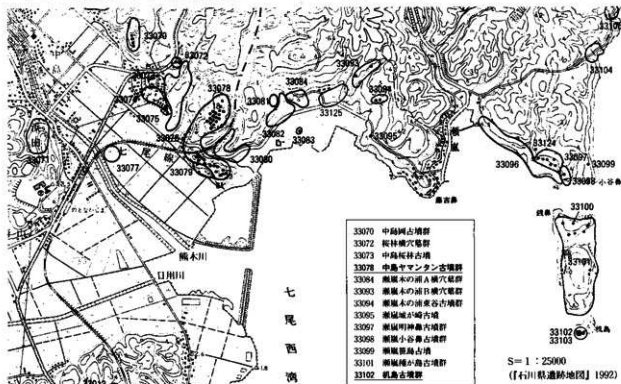
ふりがな	なかじまやまんだんこふんぐん ぶんぶちょうさほうこくしょ							
書 名	中島ヤマンタン古墳群分布調査報告書							
編 著 者 名	湯尻修平 富田和氣夫 大西 顕 唐川明史							
編 集 機 関	石川県教育委員会							
所 在 地	〒920-8575 石川県金沢市広坂2丁目1番地1号							
発行年月日	1998（平成10）年3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
中島ヤマンタン古墳群	石川県鹿島郡中島町中島	17403	33078	37° 6' 37"	136° 51' 58"	1997年 7月5日、 24～26日	70㎡	県道改良 工事
机島古墳群	石川県鹿島郡中島町瀬嵐	17403	33012	37° 5' 57"	136° 53' 42"	1997年 11月13日	10㎡	防災林植 栽工事
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
中島ヤマンタン1号墳	古墳	古墳	周溝 横穴式石室残欠	須恵器		横穴式石室を有する後期古墳		
中島ヤマンタン41号墳	古墳	古墳	周溝 横穴式石室残欠	須恵器		横穴式石室を有する後期古墳		
机島2号墳	古墳	古墳		須恵器		横穴式石室を有する後期古墳		
机島3号墳	古墳	古墳	横穴式石室残欠	須恵器		横穴式石室を有する後期古墳		
机島4号墳	古墳	古墳				古墳の可能性あり		

1 位置と環境

石川県鹿島郡中島町は、日本海に突き出た能登半島の中央部東海岸(内浦)沿いに位置する。口能登東半を占める鹿島郡域の最北に位置する当地は、東は七尾西湾を挟んで能登島、西は能登半島西海岸(外浦)へ連絡し、北は奥能登への玄関口にあたっており、交通上の要所を占める土地である。

地形的には半島中央部から派生する低丘陵が海岸線まで達する一方、東流する熊木川、日川、笠師川の三河川流域に谷状の沖積地が形成されており、中でも比較的広い可耕地を有する熊木川流域で多くの遺跡が確認されている。

古墳に限って述べると、熊木川下流南岸の台地上に築かれた上町マンダラ古墳群が初現で、全長約18mの小前方後方墳2基の存在が確認されている。第1図 中島町の位置
これに後続する中期古墳の実態は明らかでないが、後期から終末期にかけては、熊木川下流から現河口付近、そして七尾西湾の北岸域にかけての帯に約70基からなる古墳が展開する。このうち下流から河口付近に位置する殿山古墳群(円墳2)、定林寺古墳(方墳1)、岡古墳群(円墳4)、桜林古墳(円墳1)、ヤマンタン古墳群(円墳40)は、方墳や木箱直葬墳・横穴式石室墳を含むことから、5世紀後半から6世紀代を中心として築かれたものと想定される。中でも40基を数えるヤマンタン古墳群が当地の中核的な後期古墳群であったことはいうまでもない。一方、七尾西湾沿いに分布する木の浦東谷古墳群(円墳2)、城が崎古墳(円墳1)、明神鼻古墳群(円墳9)、小谷鼻古墳群(円墳2)、笹島古墳(円墳1)、種が島古墳群(円墳9)、机島古墳群(円墳3)等の横穴式石室墳をもつ小円墳で構成される一群や木の浦東谷横穴墓群等は、7世紀前半から中葉前後と時期的にやや遅れて築造されたものと見られる。小群散在型の能登の終末期古墳にあって、小形ながらも20基を超える古墳が小地域内にまとまって確認されていることは異例であり、海岸や離島という立地条件とも相まって、当地が時の海運拠点として重要な役割を果たしていたことの反映であろう。(富田和氣夫)



第2図 周辺遺跡地図

2 中島ヤマンタン古墳群の概要と1号墳出土遺物

発見と調査経緯

大正から昭和の初め頃にかけて、中島町字中島在住の岩端左治衛氏によって、ハリ塚古墳（中島ヤマンタン1号墳）の発掘調査及び周辺の古墳群の調査が行われ、その記録ノートが残されている。昭和41年11月刊行の『中島町史資料編』に、橋本澄夫氏は詳細にその調査報告を紹介し、ハリ塚古墳出土遺物の検討を行っている¹⁾。と同時に本古墳群として、5基の古墳の紹介をしている。なお、岩端ノートによる他の10基程度の古墳について、いずれも石室破壊・封土欠失等により、その所在確認が困難であると報告されている。

昭和45年夏、唐川明史が本古墳群全城の踏査を実施し、36基の確認と分布状況を掌握した。昭和47年7月30日、作業場造成工事に伴う31号墳の石室崩壊の情報を得た唐川は、発掘調査の必要性・重要性を中島町教育委員会に提言した。これを機会に、同教育委員会は調査団を編成し発掘調査を実施した²⁾。同年11月12日、唐川は再度古墳群全城の踏査を実施し、墳形・規模・分布調査等の記録を取った。その後、継続的に踏査をおこない、古墳総数41基を数えるに至った。

位置と環境

熊本川河口東岸のI文字状の丘陵上に分布する。標高58.8mの山頂から南下して、の鉄道線路の横断する鞍部から南東方向に延びて、標高20mに至る丘陵である。中島町「中島、通称ヤマンタン」³⁾の集落背後に位置する。当地は七尾西湾の最奥端であり、奥能登の玄関口でもある。

墳形と規模

円墳41基からなる群集墳である。墳丘規模は最大18m～最小5.5mを測る。群中60%を占める25基が既掘である。

分布状況から、幾つかのグループに分けることができる。2号墳～18号墳の17基(仮称A群)の内、2号墳～6号墳は丘陵尾根上に直列して築造され、熊本川流域及び七尾西湾岸城の双方



第3図 中島ヤマンタン古墳群分布図

第1表 中島ヤマントン古墳群一覧

名称	墳形	規模(m)		備考
		直径	高さ	
1号墳	円墳	14.0	不詳	別名ハリ塚古墳。須恵器、鉄器等出土。横穴式石室。石材集積。〔試掘対象〕
2号墳	円墳	16.0	2.0	墳丘中央部盗掘により消滅。周溝あり。3号墳と共に群中最高地に分布
3号墳	円墳	18.0	2.0	墳丘中央部盗掘。石材小片多数露出。石室のタイプ不明。周溝あり。
4号墳	円墳	15.0	2.0	
5号墳	円墳	15.5	1.3	昭和31年中島町史編纂事業時に発掘調査。未埋戻し。内部主体に石材認められず。木棺直葬の可能性あり。周溝あり。
6号墳	円墳	10.0	0.4	墳丘に大杉あり。周溝あり。
7号墳	円墳	11.0	0.5	いずれも既掘坑あり。トガ・杉あり。
8号墳	円墳	7.0	0.5	墳丘中央にトガ・松あり。
9号墳	円墳	11.0	0.8	いずれも既掘坑あり。
10号墳	円墳	10.0	0.7	周溝あり。
11号墳	円墳	8.0	0.8	いずれも既掘坑あり。周溝あり。
12号墳	円墳	8.0	1.0	いずれも既掘坑あり。石材露出。横穴式石室。
13号墳	円墳	9.0	1.0	
14号墳	円墳	11.0	1.5	いずれも既掘坑あり。周溝あり。
15号墳	円墳	9.0	0.6	周溝あり。
16号墳	円墳	8.0	0.8	
17号墳	円墳	13.0	1.5	いずれも既掘坑あり。
18号墳	円墳	8.0	0.4	いずれも既掘坑あり。
19号墳	円墳	14.0	2.0	
20号墳	円墳	5.5	0.5	
21号墳	円墳	12.5	2.0	墳丘1/4欠失。
22号墳	円墳	8.0	0.5	周溝あり。
23号墳	円墳	13.0	1.5	
24号墳	円墳	6.0	不詳	墳丘のほとんどを土取りで欠失。
25号墳	円墳	8.5	0.5	いずれも既掘坑あり。須恵器高杯・壺出土の伝承あり。周溝あり。
26号墳	円墳	8.0	0.5	いずれも既掘坑あり。
27号墳	円墳	11.0	0.5	
28号墳	円墳	8.5	0.5	いずれも既掘坑あり。畑地により一部欠失。
29号墳	円墳	13.0	1.7	いずれも既掘坑あり。石材使用みられず。
30号墳	円墳	7.0	1.0	
31号墳	円墳			
32号墳	円墳	6.0	1.0	いずれも既掘坑あり。
33号墳	円墳	9.0	1.0	いずれも既掘坑あり。周溝あり。
34号墳	円墳	10.5	1.0	周溝あり。
35号墳	円墳	10.0	1.0	周溝あり。墳丘の1/2以上土取りにより欠失。
36号墳	円墳	13.0	1.0	周溝あり。墳丘の1/2以上土取りにより欠失。
37号墳	円墳	10.0	不詳	周溝あり。墳丘の5/6以上土取りにより欠失。
38号墳	円墳	9.0	1.0	周溝あり。いずれも既掘坑あり。
39号墳	円墳	7.5	0.5	
40号墳	円墳	9.0	0.5	周溝あり。
41号墳	円墳?	不詳	10	いずれも既掘坑あり。墳丘状況不詳。石材露出。横穴式石室。〔試掘対象〕

を眺望できる。なお、2号墳・3号墳は群中最大であり、最高地に位置する。その他の7号墳～18号墳は熊本川流域に面する傾斜地に墓盤の目の状に築造されている。

1号墳・41号墳の2基（B群）は丘陵鞍部斜面に築造、熊本川流域河門口を眺望できる。

19号墳～25号墳の7基（C群）は1号墳の東方にのびる丘陵上に直列するようにして分布する。

26号墳～40号墳の15基（D群）は25号墳の東方の鞍部を挟んで分布する。D群はさらに3～4基ごと的小群に分岐する。C群・D群いずれも熊本川流域や日用川流域、七尾西湾岸城を眺望できる位置に築造されている。

築造時期

古墳群中、墳丘の低平なもの、内部主体が木棺直葬と想定されるもの、1号墳（ハリ塚）及び31号墳（副葬品の須恵器は、共に田辺編年 TK10型式から TK209型式に該当）のように横穴式石室のもの等、主体部構造は多様である。立地環境・分布状況・内部構造・出土遺物等から、古墳時代中期～終末期に渡り、累次的に熊本川流域及び七尾西湾岸城を本拠地として活躍した一族の墳墓域である。

1号墳出土遺物

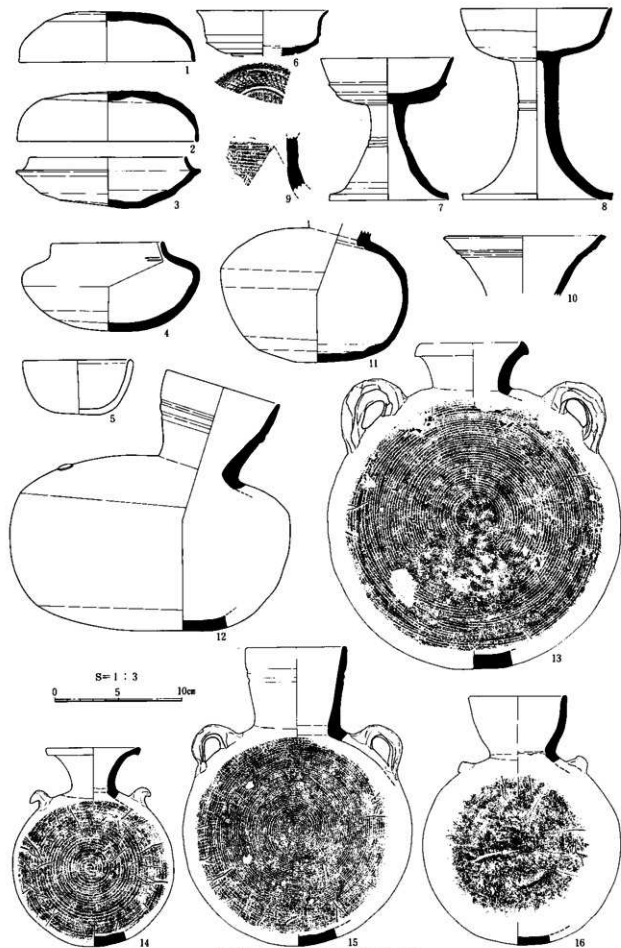
本古墳群出土として伝世されている遺物は、ガラス製勾玉5個・ガラス製丸玉5個・管玉10個・木品製切子玉5個・金環2個・直刀断片4個・刀子断片5個・鉄鏃1個・鍛先形鉄製品1個・土器類15個である。すでに橋本澄夫は中島町史資料編にて詳細に報告をしている。今回、これら報告をもとに、再度遺物閲覧の結果、土器類の一部において接合復元できたものとして7・11・12がある。また、紛失しているものとして7がある。また、完形品であったが破損しているものとして16がある。また、出土遺物ともに伝世された遺物入れ箱内には、新発見の9がある。また、鉄器類はすべて腐食によりその形を止めず鉄片となっている。

土器類の須恵器15個・土師器1個⁴¹について検討した結果、須恵器9点に篋記号があることを掌握できた。1・2・3・12・14・15・16は、形態に長短があるものの、篋記号「一」である。4は「＝」である。13は「×」である。土器製作時より何らかの区分を必要としたことを物語る。

本古墳に副葬された須恵器は（陶色編年）、TK10型式・TK43型式・TK209型式等に平行するものと考えられる。⁴²よって、本古墳への埋葬は6世紀第2四半期から7世紀第1四半期にかけて、2回以上の追葬があったものと考えられる。

（唐川明史）

- (1) 橋本澄夫「第一節考古史料」『石川県中島町史（資料編）』中島町 1966年
- (2) 濱岡賢太郎「山岸31号墳」『日本考古学年報』26 日本考古学協会 1975年
- (3) 「ヤマンタン」について、近世金石文に「山谷」の表記がある。国土地理院発行25,000分の1地形図では「山岸」を表記している。地元では漢字表記使用の例はない。唐川は地元使用例基準に則り、通称名「ヤマンタン」の表記をもって、古墳群名に用いることとする。
- (4) 無蓋高坏7及び平瓶11は須恵器の生焼（酸化炎焼成）である。
- (5) 土器類について、新たに唐川が観察・計測・実測図を起こした。須恵器編年については、木立雅朗氏の協力を得た。図トレースについては、浅野豊子女史の協力を得た。



第4図 中島ヤマンタン1号墳出土土器

第2表 中島ヤマトン1号墳(ハリ塚古墳)出土土器一覽

検出 番号	器 種	法 量 (cm)			焼成	色 調	胎土 (ae)	須恵器 編 年	備 考	中島町史資料編 基本 出土報告集 図番号	
		器 高	口 径								
1	須恵器	坏蓋	4.0	14.0		良好	青灰色	1~5石英 少量含む。	T K 43型式	外面磨削り。外面中央部に 記号一あり。	第17図5
2	須恵器	坏蓋	4.0	14.4		良好	青灰色	1~5石 英少量含む。	T K 43型式	外面磨削り。外面中央部に 記号一あり。内面天弁部に 朱付着。3の坏身とセット。	第17図6
3	須恵器	坏身	4.0	12.4	蓋受部 径 14.6	良好	青灰色	1~5石 英少量含む。	T K 43型式	外面磨削り。外面中央部に 記号一あり。蓋受部に鉄塊付着。 2の坏蓋とセット。	第17図4
4	須恵器	短頸 壺	7.0	8.9	胴 径 14.0	良好	青灰色	1~2石英 少量含む。	T K 43型式	頸部に記号一あり。底部磨削り。	第17図9
5	土師器	碗形 土器	4.4	8.8		良好	黄褐色	0.16砂含む。		内面黒色研磨。胎土に 海綿骨片含む。	第17図10
6	須恵器	無蓋 高坏	坏部高 3.6	復 元 10.5		良好	暗青灰色	0.5以下の 砂粒多量 に含む。	T K 10型式	坏部外面に曜目刺突文 帯あり。脚部欠失。	第17図2
7	須恵器 (生焼)	無蓋 高坏	11.2	10.5	脚 径 9.4	不良	赤褐色	砂粒含ま ず緻密。	T K 209型式	坏部・脚部別々であつた が接合復元。1994年 時すでに所在不明。	第17図3
8	須恵器	無蓋 高坏	15.0	11.8	脚 径 11.8	良好	濃緑青灰 色	1~4石 英多量に 含む。	T K 209型式	坏部2分の1欠失。 坏部内面自然輪付着。	第17図1
9	須恵器	器台				良好	青灰色	0.5以下の 砂粒多量 に含む。	T K 10型式	脚部割片。三角透窓あり。 平行カキ目。帯掻 液状文。	掲載無し。
10	須恵器	施		12.7		良好	濃緑青色	1~5石 英多量に 含む。	T K 10型式一 T K 43型式類	胴部欠失。11縁部4分 の1欠失。	第17図7
11	須恵器 (生焼)	平瓶	胴 高 10.6	頸 径 5.0	胴 径 15.0	不良 風化著し	淡赤褐色	1石英少 量含む。 緻密。		口縁部欠失。20破片接 合復元。体部回転カキ 目成形。	第 17 図 11・12・ 13
12	須恵器	平瓶	復 元 20.6 胴 高 13.9	復 元 9.5	胴 径 22.2	普通	灰青色	1~5石 英多量に 含む。	T K 43型式	口縁部4分3欠失。胴部 ボタン状裝飾2つ付く。体 部回転カキ目成形。外 面底部に記号一あり。	第17図8
13	須恵器	提瓶	25.8	8.0	胴 径 23.1 胴 厚 14.0	良好	濃緑青色	0.01砂粒 多量に 含む。	T K 10型式	体部回転カキ目成形。 口縁部一胴部上半分に 自然輪付着。胴部下方 に穿孔あり。胴部に 記号×あり。	第18図1
14	須恵器	提瓶	15.9	7.5	胴 径 12.7 胴 厚 7.3	良好	淡灰茶褐 色	砂粒含ま ず緻密。	T K 43型式	体部凸面回転カキ目成 形。体部平面磨削り成 形。体部平面中央部に 記号一あり。	第18図3
15	須恵器	提瓶	23.8	8.1	胴 径 18.1 胴 厚 13.3	良好	濃緑青色	1~5砂 粒含む。	T K 43型式	体部両面共にカキ目成 形。体部中央部に記号 一あり。	第18図2
16	須恵器	提瓶	19.8	7.8	胴 径 15.6 胴 厚 9.7	良好	灰青色	1~5石 英多量に 含む。	T K 209型式	体部凸面ナゲ成形。大 部平面磨削り成形。両 面共に中央部に記号一 あり。	第18図4

3 調査の経緯

一般県道長浦中島線の道路改良計画は、平成5年度県土木部事業の埋蔵文化財取扱い協議会のヒアリングの際に計画が提示されてことに遡る。埋文センター企画調整課では協議を進め、試掘による分布調査を実施し、事前の遺跡の有無を確認することとなった。一般県道中島長浦線は、中島から瀬嵐を抜けて長浦まで海岸沿いに結ぶ延長7kmの道路である。七尾湾に臨む平野から上がった低い台地を切り通しての鉄道七尾線の山岸踏切に至るが、踏切の中島側にはハリ塚古墳(中島ヤマタン1号墳)が位置する。平成5年度の工事は山岸踏切の瀬嵐側の畑地を両側に拡幅する計画であった。3月8日に約300㎡を対象に試掘調査を行い、縄文土器片の散布を確認した。しかし、土器はその出土状況から畑地造成時の盛土中に二次的に混入した状態であると判断されたため、文化財保護法第57条の3第1項による手続きをとって立会調査を行うこととした。5月27日に工事中の立会を行い、縄文土器片をポリ袋に2袋程度を採集した(深鉢の破片から中期と推定)。

平成7年度から改良事業は、踏切の中島側で計画されたが、ハリ塚古墳の保存に影響が及ぶことが推定されたため、古墳の規模を把握するトレンチ調査を行うこととなった。分布調査依頼は七尾土木事務所から平成7年7月26日付けで提出されたが、細い樹木の伐採が必要であり、土地の境界確認と地権者の承諾を得るのに時間を要し、調査を実施したのは平成8年7月に至ってからであった。なお、当年度からは組織変更により教育委員会事務局文化財課が担当した。

調査結果は本書に記述しているが、ハリ塚古墳の他に、山岸41号墳とした古墳1基の存在を確認し、平成8年8月1日付で七尾土木事務所長あて回答した。幸い、工事の具体的な設計はトレンチ調査の結果を取り入れて進められ、古墳の周溝を含めて現状で保存することとなった。記録保存を前提とした調査が多い中で、平成7年度の七尾市三室古墳群の移設復元整備とともに土木部の埋蔵文化財保護に対する理解と協力に感謝したい。

(湯尻修平)



1号墳の現状



作業風景



作業風景



作業風景

4 分布調査結果

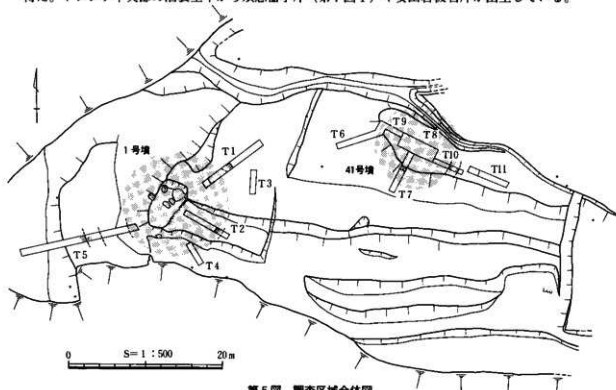
分布調査は、平成8年7月5日、24日～26日の4日間、県道拡幅予定区域内の約2,000㎡を対象に、設定した試掘坑を作業員による人力掘削で調査する方法で実施した。調査の第一目的が埋蔵文化財の有無と保護措置を要する範囲の把握にあり、短期間の調査でもあったことから、個々の調査項目についての検討が不足気味である感が否めないが、当初の目的である古墳の位置と範囲の概要については一定の所見を得ることができたので、以下に報告する。

中島ヤマタン1号墳（ハリ塚古墳）

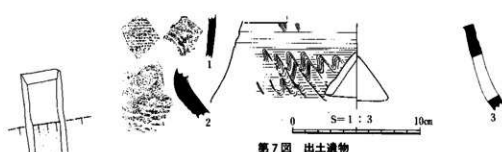
当古墳は前掲の唐川氏報文のとおり、戦前に地元郷土史家によって発掘され、石室内から出土した鉄刀、ガラス玉、須臾器等の副葬品が町の文化財に指定されている古墳である。現状は墳丘盛土の大半が発掘後の畑地造成によって削平を受け、古墳の範囲が不明確な状況にあった。今回は、この点を確認するためにT1～T5の試掘坑を設定した。

その結果、T1及びT2で周溝と日される溝の存在を確認した。溝の規模は墳丘山側にあたる試掘坑T1で幅約2.5mを測り、風化した小礫混じりの橙褐色粘質地山を掘り込んで、内部に暗褐色土を堆積している。T2では樹木に阻まれ溝の立ち上がり付近を確認したに止まったが、両者から古墳の少なくとも山側には周溝が巡っていることが確認された。墳丘盛土はT1～T4にかけての区域では完全に削平されており、表土直下に地山が現れる状況であったが、古墳の南西方向に設定したT5で、トレンチ東端から約1mの範囲に盛土および旧表土と見られる土層の存在を確認した。これらから1号墳は直径約14m前後の円墳であると判断するに至った。

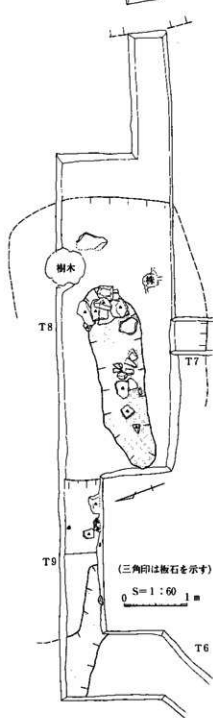
なお、T5の中央付近には等高線に沿って幅7m程の緩斜面が形成されていたため、墳丘外周の整地面となる可能性を想定して調査を行ったが、当該部分は厚い表土層と攪乱された造成土、造成以前の旧表土層で構成されており、土質の状況から畑地造成に伴って形成された緩斜面であるとの結論を得た。トレンチ中央部の旧表土中から須臾器小片（第7図1）や安山岩板石片が出土している。



第5図 調査区域全体図



第7図 出土遺物



第6図 41号墳石室確認状況

1号墳の墳丘中心部分に存在する祠状の石積みや周辺の石列は、石材の設置状況を見る限り、個々の石材が面を揃えず乱雑に配置されており、本来の石室の一部とは考えにくい。おそらく周辺の開墾時に石室材を利用して再構築された段々畑の法面保護石垣の一部ではないかと推定される。したがって、1号墳の石室構造や開口方向は不明と言わざるを得ない。周辺に残されている石材には、横穴式石室の天井石と推定される大形石材(長140×幅80×厚40cm)、石室側壁主材と推定される中形角礫(長80×幅50×厚30cm前後)、同副材と推定される小形角礫(径30~40cm前後)、詰め石ないし床面敷石と推定される小礫および安山岩板石が認められる。このうち側壁主材は20個前後が祠とその周辺に点在し、側壁副材は約60個が畑地造成時の土止め石垣として再利用されている。

中島ヤマタン41号墳 (第6図)

ヤマタン41号墳は、唐川氏の踏査で径約10m程度の円墳となる可能性が指摘されていたが、現状では墳丘の高まりを確認することはできず、僅かに点在する角礫によって古墳の所在を推測するほかない状況であった。そこで、試掘ではまず角礫が点在する地点に試掘坑T8を設定し、角礫の性格を確認した上で、T6・7・9・10・11に調査を広げ、古墳の範囲を探る方法を探った。

その結果、当古墳は規模10mの古墳で、横穴式石室の基底部が残存しており、出土した須恵器片から、6世紀中頃に1号墳と相次いで築造された古墳であることが判明した。

まず、T8では表土の腐食土層を除去した段階で、10~40cm大の石材十数点が検出された。これらは表土中もしくは表土直下の暗褐色土層中に含まれていたもので、いずれも原位置を保つものではないが、角礫と安山岩板石からなる構成から見て横穴式石室の部材の一部と見られる。これら石材が集中している区域は長さ約3m、幅約70cmの範囲で帯状の暗褐色土層が東西に広がっており、内部の調査は実施していないが、石室の攪乱痕跡であろう。この周囲は暗橙褐色土に漸移し、T8東端付近

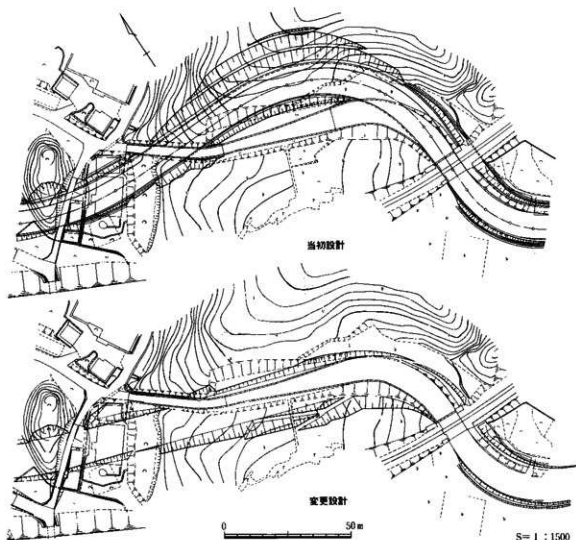
やT7北端付近で地山と見られる暗褐色粘性土に一線を画して変化する。これが石室基底部のホリカタとなる可能性を認め、攪乱痕跡の方向と合わせ見ると、西側に開口する石室を想定することができる。この場合、攪乱痕跡から1m程東側に離れた位置で、暗褐色土中埋もれていた角礫は、奥壁の一部である可能性が考えられるが、いずれにしても調査の性格から表土層直下で掘削を停止しているため、確定的なことは将来の発掘調査を待つべきであることは言うまでもない。

T8から延ばしたT7・9・11の各試掘坑では古墳の周溝を確認した。墳丘の背面にあたるT10の周溝は幅1.0~1.5m、深さ40cm、側面のT7では幅70cm、深さ30cm以上（未完掘）、前面のT9では幅40~70cm（未掘）を測る。

第7回2・3の須恵器片は、いずれもT8の石室攪乱痕跡と目される暗褐色土上面から出土した。2は蓋ないし甕の肩部、3は器台の脚部片で波状文と二段の三角形透かし穴が確認でき、6世紀中頃に位置づけられる。攪乱土中の出土ではあるが、本来は石室内に供献されていた土器であった可能性が高く、当古墳の所属時期を示す手がかりとなろう。

以上の調査結果を受け、当初の道路改良計画は第8図のとおり設計変更され、古墳は現状保存されることとなった。

(富田和氣夫)



第8図 道路線形と古墳の位置

5 机島古墳群

本章は、平成8年11月に石川県鹿島郡中島町瀬嵐地内(机島)で工事中に発見された机島古墳群(2～4号墳)の調査報告である。

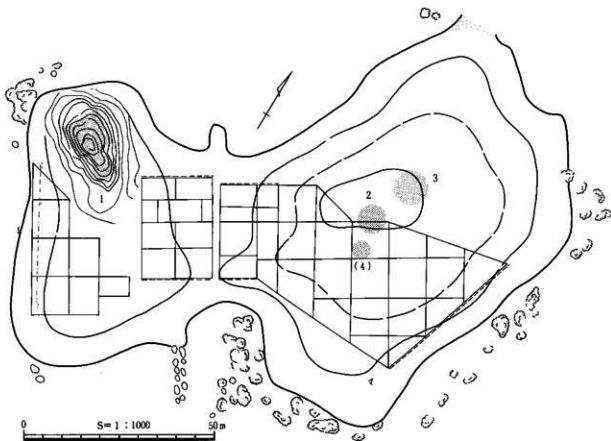
1 位置と環境

机島は能登半島の東岸、波静かな七尾西湾に浮かぶ周囲約330mの無人の小島である。奈良時代には、越中国司大伴家持が能登巡行(748年)に際し机島を詠んでいるため、“万葉の島”として人々に知られている。また、島内には「机石」「硯石」と呼ばれる大小様々な石が散在している。なお、机島の基盤は安山岩で構成されている。

机島の南西海上に突出する「オオバナ岬」には、万葉歌碑がのる土地の微隆起が存在する。昭和62年に善端直氏をはじめ奈良大学考古学研究室関係者がこの地域を測量調査し、その結果から微隆起を全長約18mの前方後方墳でないかと推定している(机島1号墳)。当時の新聞はこの予想外の出来事を大きく取り上げている。なお、島対岸には前章で報告した中島ヤマンタン古墳群をはじめ、瀬嵐・種ヶ島古墳群など多くの重要な古墳群が密集している。

2 発見に至る経緯と経過

机島はそもそもクロマツが島全域に群生し、風光明媚な景観を生んでおり多くの人々に愛されていた。しかし「松くい虫」の被害に遭い、その大半が枯れてしまった。かくなる事態に石川県は県単防



第9図 机島古墳群分布図

災林事業として平成6年度から植栽工事に着手した。この工事は10m四方に竹垣（防風柵）を設置した上で、中にクロマツの苗木を植栽するものである。

工事は机島1号墳を避ける形で島南西側より着手されており、平成8年度は島中央部の工事を進めていた。ところが、石川県埋蔵文化財保護地区協力員である近間強氏（県立七尾高校教諭）が平成8年11月4日に同校の郷土研究部員と島内の大伴家持歌碑調査中に、防風柵設置のため掘削した溝から古墳時代終末期の須恵器が出土しているの発見した。近間氏はただちにこの事実を県教委に報告を行い、これを受けて県教委文化財課職員（富田、大西）が11月13日に現地に向かった。なお、現地調査にあたっては中島町教育委員会職員（高田則晃、山本純也）の協力をいただいている。

現地では、工事の溝掘りがほぼ完了した段階であり、その溝内の精査及び排土中の遺物の有無の確認を行った。須恵器の出土についてはほぼ同一箇所集中しており、岩石についても不規則な散布状況を示しているものの、何ヶ所かまとまる地点があった。さらに島中央の最頂部に地形の高まり及び盗掘坑とみられる穴、そして穴中に配置された石列及び須恵器片を確認した。以上より、工事区域およびその近接地には2基以上の横穴式石室が存在するものとして、事業者（七尾農林総合事務所及び施工業者である中島町森林組合）とその場において古墳の保存について協議を行った。

協議の結果、事業者側が非常に協力的であったため、古墳が確認された範囲内での工事を中止し、工事区域を古墳のない海側へ振りかえることで合意ができた。なお、調査については13日中に終了し離島している。

3 古墳の概要

(1) 机島2号墳

須恵器集中出土地点から東側にかけて地形の高まり、及び横穴式石室の一部と推定される石列がありこれを2号墳とした。6～8m規模の古墳と推定されるが、内部構造については現状では正確なプランを確認できなかった。

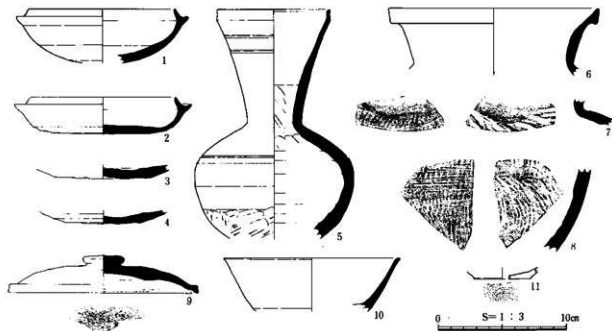
遺物は第10図1～5、9～11が2号墳及びその周辺（正確な出土位置については不明）から出土している。1は口径11.4cmの杯身、内外面とも灰黄褐色を呈す。2は口径11.3cmの杯身で内外面とも灰色。3は杯で内外面とも黄灰色。4は杯で外面暗灰色、内面黄灰色で断面は赤い。杯はいずれもケズリは行わず、ヘラ切り後も無調整（2のみナデで仕上げている）である。5は長頸瓶で口径8.9cm、灰色を呈し、頸部に2本、胴肩部に1本の沈線が施されている。底部に台が付くかどうかは不明。体部下半がヘラケズリされている。以上は7世紀前半の所産と推定される須恵器である。

9は口径14.8cmの須恵器蓋で、外面全体に降灰を受けている。外面の半分はケズリを入れている。内面にヘラ記号のような線が認められる。10は口径13.9cmの須恵器杯である。11は土師器碗の底部で糸切り痕がある。海綿骨片を多く含む胎土である。時期は9が8世紀前半、10が7世紀末、11は細片で難しいが10～12世紀の所産であろう。

1から5については2号墳被葬者の埋葬時期を示すと思われるが、9、10は古墳に関連するものかは不明。なお、島内には周知の机島遺跡があり、他の溝掘りからも中世等の土器片が少量であるが普遍的に採取できる。11もこれと関係する遺物かもしれない。

(2) 机島3号墳

机島最高部（標高約4.2m）に位置する径9m、高さ0.8mの円墳である。墳頂に1m四方（深さ60cm）の盗掘坑と思しき穴が存在する。穴内は盗掘？により攪乱が激しいが横穴式石室の一部（女室の奥壁付近）が確認できる。石室は東側に開口すると推測され、女室幅は約1m、現存高0.5mである。



第10図 出土遺物

石室長は不明。奥壁は1段確認でき幅70cm、厚さ45cmの安山岩質と推定される大型角礫を使用している。側壁は同じく角礫を使用し2段確認（現存高30cm）できる。なお、これら角礫上及びその周辺には長さ10cm～40cm大の板石が多量に確認でき、何らかの石室材として使用（床石にも使用されていた可能性がある）されているものと推定される。

遺物は第10図6、7、8が石室内（の表土中）より出土しているが、これらはおそらく同一個体で須恵器甕でないかと推定される。口径は16.3cm。内外面とも灰色で断面が赤い。8の外表面は平行タタキの後、カキ目をほどこしている。時期の特定は難しいが7世紀の枠におさまるものと推定される。

(3) 机島4号墳

2号墳より標高が下がった位置に巨石が積み重なった箇所があり、これが横穴式石室の可能性もあるため、古墳として現状保存したものである。封土は流失しており、遺物の出土もないため詳細については不明である。なお、この2～4号墳一帯の巨石の散布状況では、さらに数基程度の古墳が存在可能性もある。

4 まとめ

機島の種ヶ島には横穴式石室を有する多くの古墳（6世紀末～7世紀）が密集している。今回発見された机島2～4号墳もその一連の古墳と推定される。ヤマンタン古墳群が6世紀後半が主体なのに対し、これら海岸部の古墳群は7世紀代が主体ということで古墳群の中心が海岸沿いに移ってくる傾向がある。その理由の言及はできないが、いずれにしても机島古墳群の被葬者は、眼前にひろがる七尾西湾に深く関与した在地の有力者であったと推定される。

（大西 顕）

参考文献

善端 直「机島1号墳の墳丘測量調査の記録と成果」『石川考古学研究会々誌』第31号 1988年
垣内光次郎ほか「中島町の原始・古代」『中島町史』通史編 中島町 1996年



1号墳 石室の現況



1号墳 周溝の検出状況(T1)



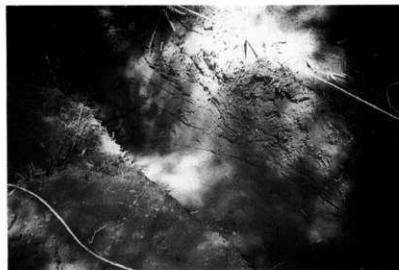
1号墳 周溝の検出状況



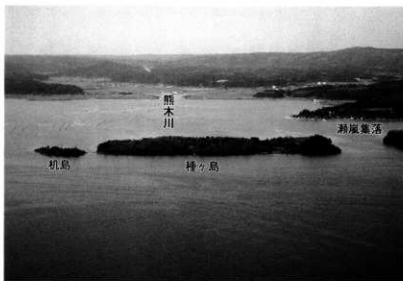
41号墳 石室の残存確認状況
(T8)



41号墳 石室ホリカタの検出
状況 (T8)



41号墳 周溝の確認状況
(T10)



帆島遠景（東上空から）



帆島2～4墳近景
(数字は古墳の位置を示す)



古墳の保存について協議中
(2号墳上)
※×印は銅器出土地点



机高2号墳



机高3号墳
(石室部既掘坑の状況)



机高4号墳

中島ヤマントン古墳群分布調査報告書

附 机島古墳群

平成10年3月31日

編集・発行 石川県教育委員会

印刷・製本 能登印刷株式会社